

# 報告・韓国の東アジアをめぐる議論と 古代の記憶

獨協大学国際教養学部准教授

小宮 秀陵 (コミヤ・ヒデタカ)



韓国における広域論の発展は、一九五〇年代末から始まった。当時、韓国の学界では、東亜・東方・亜細亜といった用語が使用され、韓国を世界の中でどのよう

に位置付けるかが重要な課題となっていた。特に朝鮮戦争の影響で、韓国は国際的な視点を持つ必要性に迫られた。一九六五年にアメリカで開催された朝貢制度に関する国際会議では、中国中心の歴史観に対する批判が進んだことから、韓国では独自の広域世界に対する研究が進んだ。

一九九〇年代以降、冷戦の終結に伴い、東アジアという用語が頻繁に登場するようになり、歴史認識論争が活発化した。韓国では新羅や渤海などの地域を含む広域空間の議論が進み、東部ユーラシアという新たな地域設定が注目されるようになった。これは、中国中心の歴史観から脱却し、多元的な国際関係を描く試みを行っていたことを意味する。このように、韓国の広域論は、歴史的背景と現代の課題を結びつける形で進化してきたのである。

一方、東部ユーラシア空間における広域論は、現代の課題を過去に投影する性格を持ち、古代の歴史像が捨象される問題を含む。

新羅の真興王巡狩碑は、真興王が領土拡張と権威を示すために立てた石碑で、北漢山、黄草嶺、磨雲嶺、昌寧の四つが知られている。これらの石碑は、新羅の内政整備や国史編纂と密接に関連しており、高句麗の影響を受けた新羅の自尊意識の形成に寄与した。特に北漢山の石碑は、新羅が漢江流域を掌握し、東アジアへの通路を開いた象徴的遺物とされている。王の権威や歴史的記憶を伝える重要な遺物として位置付けられてきたのである。しかし、近代の分析ではその伝承や逸話が排除され、石碑の古代的な意義のみが強調される結果となってしまった。

歴史を読み解く際には、現代の問題と向き合うことが重要である。クローチエの「すべての歴史は現代史である」という言葉に示されるように、古代だけでなく現代の問題意識を持ち、研究対象から外れるものを再検討する姿勢が重要である。この姿勢を基に広域空間や記憶にアプローチすることで、より豊かな歴史像を描きうる可能性があるためである。

## プロフィール

●青山学院大学を卒業後、東京大学とソウル大学校で学び、ソウル大学校にて博士号を取得。啓明大学校招聘助教授を経て、現職。新羅・渤海と韓との関係を中心に、古代東アジア史や記述史に関心を寄せ研究を進める。おもな業績に「韓国古代史研究における東部ユーラシア」(中央史論 五八、ソウル、二〇二三)などがある。